

上田市教育委員会 8 月定例会会議録

1 日 時

平成 21 年 8 月 26 日（水）

午後 1 時 30 分から 2 時 55 分まで

2 場 所

上田市教育委員会（やぐら下庁舎） 2 階会議室

3 出席者

委 員

委 員 長	西田 不折
委員長職務代理者	金子 泰子
委 員	生田千鶴子
委 員	春原 秀一
教 育 長	小山 壽一

説 明 員

小市教育次長、小野塚教育総務課長、中村学校教育課長、澤山人権同和教育政策幹、中部文化振興課長、細川体育課長、清水丸子地域教育事務所長、荒井真田地域教育事務所長、浅野中央公民館長、綿内川西公民館長、坪田上田図書館長

<協議事項>

- 1 平成20年度上田市教育行政に係る事務の点検及び評価報告書(案)について
資料1により小野塚教育総務課長説明

金子委員

懇話会委員からの意見は、的を射た「なるほど」と思うものが多く興味深く読ませてもらった。

事業番号1- の委員からの意見で「この評価において、最も重要なことは子どもたちによる評価である」という指摘があり、それに対し教育委員会の考え方として「授業に対する児童生徒の声を聞き、云々」と示されているが、今後の方針のところにはそれに対する記述がない。意見に対する考え方として具体的な方法は次年度のところに入ってくるのか。委員さんからの意見に対する考え方は対応的にきちんと取り上げられたと思うが、今後の方針のところでごっと薄まってしまっている。

中村学校教育課長

今後の方針については、枠の関係もあり詳細に記述はしていないが、「授業評価のアンケート項目等を精査し」という表現の中に、保護者や児童生徒等の学校関係者評価が入っているということである。

西田委員長

こうした記述方法は、1- に限らない。

中村学校教育課長

そうである。

西田委員長

具体的には、来年度のところに入ってくるのか。

小山教育長

それについては今年度から生かしていきたい。3月にならないと本年度の事業が終了しない。したがってそれについての評価がどうしても新年度になる。前年度の事業を評価してもらっても次年度に生かせるか。実際には難しいようであるが、行政評価懇話会の開催時期の変更を含め、どういう形で早く生かせるかももう少し検討させていただきたい。

生田委員

1- で授業評価・学校評価が上田市 36 校でどのようなアンケート項目によって成されているのか。教育委員会ではそれを把握しているのか伺いたい。

今回このような議題が出ているので、小学校・中学校にお子さんを出している人に聞いてみた。ある中学で授業評価をしているか聞いたら、参観日に感想用紙が配られるだけで、その他のアンケートは出していないと認識していた。小学校にもそういう方がいて、上級生は自分の学校生活、例えば「廊下は走らなかったか、歯を磨いたか」等についてのアンケートはあったが、学校側に対してはなかったと聞いた。各学校にアンケート項目を書かせるにしても、教育委員会がこういった項目を保護者や子どもたちに配り、その結果をどのように生かしていくか把握し、検証していかないことには評価をやっていきますと言っても充分とは思えず、やる意味がない。

1- で「細かな支援体制の充実」とあるが、学校訪問する中で随所に不安を感じるところがある。「個性を尊重する教育」が見える気がするが、“皆に仲良くしよう。一人でいる子がいないようにしよう”という掲示を学校の中で目にしたことがある。個性的な子の場合、ちょっと外れたりするといじめに合うことがある。自分もそうされるのが嫌だから皆の仲間に入っていじめに加担するということが往々にしてある。本当に個性の尊重、“皆違っていいんだよ”を打ち出すのであれば徹底してその教育方針を教育委員会として打ち出していかなければいけないのではないか。そういったところの欠如から孤立してしまったり不登校になったり、いじめがいつになってもなくなるのではないかと感じる。もう一度しっかり考えて各学校に示していかなければいけない。

あと1点は2- であるが「学校給食のあり方検討事業」で取組方法(年度当初)として「学校給食運営審議会を設置し」と書いてあるのに(年度末)では「設置には至りませんでした」と書いてある。今後の方針の中で「学校給食運営審議会を設置し」とまた書かれているが、「年度当初で設置し」と書かれているのになぜ年度末で設置に至らなかったのか。そしてまた今後の方針で設置をするということであるが、具体的にいつ頃、構成人員はどういった方々を審議会の中でメンバーにするのか、人数はどれくらいを考えているのかを聞かせていただきたい。

中村学校教育課長

1- の学校評価の関係であるが、平成 20 年度から全ての学校で評価が行なわれ、その結果については学校設置者の上田市にきているのでどういうアンケートであったかは承知している。学校によって保護者、児童生徒等に対する質問項目はバラバラである。中には授業参観の時にやっただけという学校もある。この制度はまだ始まったばかりなので検討する余地はあると考えている。公表の仕方についても学

校だよりで公表したもの、あるいはPTAで公表したものと差異があるので、それも含めて検討の必要があると思う。

「個性の尊重」という件については、個々の問題もあり難しい部分もある。学校の標語がどういう意図で書かれているかわからないが、お互い仲良くという意味は仲間外れになってしまっただけでは困る、という意図ではないと思う。いずれにしても今後の教育委員会としての方針に生かしていきたい。

小野塚教育総務課長

2 の「学校給食のあり方」についての質問であるが、審議会を設置して検討していくという内容で取り組んできたが、栄養、食育、地産・地消、提供方法、直営か委託か等の運営方法など幅広い項目にわたって審議いただく必要があり、その辺が少し慎重になったということと、昨年丸子学校給食センターの火災があり、それに対する対応等で、最終的に審議会の設置に至らなかった。今年もまだできていないが、年内には設置したいと考えている。委員は11人以内と条例で決まっているのでその中で選んでいく。具体的には、学校関係者、保護者、食育の専門家等の学識経験者、大学の先生等が考えられる。

春原委員

1- で達成状況を読ませていただくと、授業評価を取り入れた、あるいは情報教育担当指導主事が研修会等を開いたとある。この狙いは、わかる授業・楽しい授業の授業改善である。わかる・楽しい授業にどう近づけるか、どういう成果が上がっているかを学校と教育委員会がつかんでいるか。つかむ手立てや方法があるのか。それがなければ意見に対する考え方の中では「重要と考える」「必要と考える」となる。その評価をどう生かして授業改善に結びつけていくのか。学校お任せでいいのか。市教委としてどうつかんで学校を支援していくのか見えない。やることは取り入れたがその成果をどう検証して何をしていくか、その辺が一番問題である。

1- の キャリア教育・五感教育で上田市として核になるのは何か。それがアクションプランになると思う。言葉の中ではキャリア教育・五感教育になってくるが上田市として何を大事にするのか。プランの中にどう核を位置付けるか、そんな問題が投げ掛けられた。

4 「学校支援地域本部事業」の中では“子どもたちを支援することで教師を支援するものではない”という意見がある。これを上田市教育委員会はどう受け止めるか。地域や市民がどう受け止めているかを認識しないといけない。杉並区では夜、塾の先生を連れてきて夜スペシャルという補習授業をしている。地域本部事業にはそんな幅広さがある。上田市とするとどこまでやるか。授業にボランティアが入っていることがどうか。折角学校で取り入れても、学校の先生たちは地域のボラ

ンティアがきて楽をしているのではないかという話しを聞くこともある。上田市として地域本部事業をどこまでするか決めないと次の学校へ広げる上で問題がある。

19ページの4 - 「青少年体験活動推進事業」であるが、委員からの意見に「参加する子どもに偏りがみられる」というのがある。この事業は発足当時は不登校関係、あるいは自閉障害の子どもたちのためのものではないかと思う。会を重ねることによって偏りが生じている。この辺のところをどう受け止めて次に生かすか。今までやってきた事業だからそのまま継続していくのか。変える時は変える、趣旨を変える、やり方を変えるなど今後の手立ても考えたいと思う。

中村学校教育課長

1 は教育委員会としては、全体を一律にどういう目線でどういう改善をし、どういう成果が上がるか諮る術がない。学校にお任せの状況もあるが、子どもたちがわかりやすいかどうかが一番大事なので、去年のアンケートと今年のアンケートを比較しながら進める等により改善を図りたい。

キャリア教育・五感教育では上田市としてどういうものを中核にしていくかはアクションプランを今後作成する中で決めなければならない。

学校支援地域本部事業は先生のためではなく子どものために行うということについてはその通りだと思っている。地域の方が学校で環境整備支援や、学習支援をしていることは一見先生が楽をしているように見えるが、地域の方が学習支援することで先生方は本来の仕事ができる。学校の中で先生によって温度差があるということなので、本来は先生の仕事であるが地域を上げて学校を応援しますよということを進めたい。

生田委員

1 - の授業評価・学校評価のアンケートの件で 36 校の結果は把握していないがアンケート項目は把握しているということか。

中村学校教育課長

アンケート調査の結果も把握している。

小山教育長

授業アンケート、授業評価というのは教育委員会へ提出する必要はない。学校評価の中にわかりやすい授業を行うという評価項目がある。学校評価については、教育委員会に報告すると同時に公表しなければならないことになるので、学校評価の一部として公表されているということである。学校評価を行うためには、生徒・保

護者・地域の方たちに対するアンケートを行なって、そのアンケートを参考にして自己評価をする。学校の行った自己評価、関係者評価については、教育委員会に報告しなければならないので、教育委員会には必ず報告がきている。しかし、学校自己評価を作るために行ったアンケートは、教育委員会に報告する必要はないのでできていない。学校自己評価は、重要なことであるのでもう少し学校運営に生かせるよう改善を図っていきたい。授業評価、授業アンケートについては、小学校低学年、中学年、高学年、あるいは中学生というように段階ごとの雛形を作り改善を図っていく予定である。

授業アンケートにより、わかりやすい授業ができているかどうか、子どもたちがどう受け止めているか、あるいは適正な声で授業が進められているか、というような子どもたちの評価を集めてきて学年会なり教科会の中で検討していただく。あるいは校内で勉強していくというような形で活用していくことが必要だと思っている。

わかりやすい授業の関係からいうと学力検査、このテストの結果を各校の教育課程検討委員に集まってもらって精査をし、これを使って上田市の子どもたちの現時点での学力面での強みと弱みがどこにあるか分析する。弱みの部分を改善するにはどうしたらいいか、強みを伸ばしていくにはどうしたらいいか、こういう検討は昨年度も行なっているし、今年度も行っていく予定である。これと授業アンケートは両方とも授業改善を進めていくということであるが別立てであり、区分して考える。

学校評価については、評価項目を点検していくことが必要だと思っている。内閣府の学校教育に関する全国の保護者アンケートによると、学校評価の結果を見たことがあるという保護者が15.4%しかいない。学校評価の実施はしているが、結果を見たことがないという保護者が11.8%。学校評価を実施しているかどうかについては全く知らないという保護者が71.8%。現時点において言うならば、全ての学校が学校評価を行い、自己評価を行い、保護者にアンケートをしたりしながら関連した評価を行い、教育委員会に報告し、保護者や地域の住民に公表している、こう回答している。しかし、保護者の認識は今言ったような状況である。学校評価のシステム、やり方、公表の仕方、これについて上田市でも改善する必要があると考えている。

生田委員

詳しく説明していただいたがすごくシンプルな話で、アンケートというものが実際子どもがいる人に聞いた話と文章に書かれていることから期待することとかなり乖離している。そういった意味でどのような内容のアンケートがいいか。一番大事なのは真剣にわかる授業、真剣に楽しい授業にしようという気持ちである。保護者の話からそこに不安を感じている。アンケートは、教育委員会に提出する義務はないかもしれないが、どういったアンケートを出しているか、真剣にわかる授業、

真剣に楽しい授業にしようとする学校なのかどうか、なかなか感じる事ができないので、確信を得る意味でも義務ではなく依頼として提出していただきたい。

小山教育長

授業アンケートについて、各校で昨年度までどのような形で授業アンケートをやっているかを聞きながら、また、高等学校では生活実態調査の中に学校満足度調査が入っていることから、そんな例も提供しながら小学生用・中学生用のモデル評価シートの例を作っていこうということで学校教育課に作成をお願いしている。“例は提示するが必ずそれでやりなさい”ということではない。今まで学校でやってきたのはどういうものか、教育委員会ではこんな例を作ってみたのでこういうことについて子どもたちの意見を受け止めて下さい、というような話し合いをしていきたいと考えている。

金子委員

事業名の中に「魅力ある、わかる、楽しい」と3つ形容詞がついているが疑問に思っている。「魅力ある」の中に「わかる」「楽しい」も入っている。わかると力がつくは別の問題である。魅力ある、しかも力のつく授業でないと成果が上がらないと思うので、事業名を抽象的な形容詞をつけるよりは「力のつく」としてほしい。わかるからできるとは限らない。子どもたちが実際に自分で解ける、語れる、簡単にできる基礎学力をつけなければならない。評価する側としては、学習意欲が高まったかということと、実際に学力が高まったかどうかをきちんと検証していかなければならない。事業名の再考の余地はないか。

中村学校教育課長

事業名については、平成20年度の重点目標であるので変更できない。来年度以降検討していく。懇話会の委員からも「楽しい」だけではおかしい、「質の高い」という言葉を入れてほしいという意見をいただいた。質が高いからわかり、楽しくなるということであるのでそんな点も考慮したい。

春原委員

私もその言葉が大変気になった。1- だけで「魅力あるわかる楽しい授業、わかる授業、わかりやすい魅力ある授業、質の高い楽しいわかりやすい授業」、さらに「わかりやすく、非常に興味を持ってもらう質の高い授業、わかりやすい魅力ある授業、わかりやすい授業」、この中でこれだけの言葉が入っている。「楽しい」という言葉がうっかりすると「おもしろおかしい授業」を指していることになるのかと心配している。ここ何年間「わかる楽しい授業」と使ってきたが変えていかなければ

ればと思う。特に「楽しい」という言葉である。学校教育課としても迷って使っているのではないかと思う。読めば、聞けばわかる言葉に置き換える。「わかりやすい、わかる」はわかるが「楽しい」というのが受け止め方によっては他の質のものとして受け止められる。検討すべきではないかと感じている。

西田委員長

「わかる授業、楽しい授業」という標語のキャッチフレーズは再三検討した結果のキャッチフレーズである。目指すところは不登校、学校が面白くない、授業が面白くない等を改善するためにどうしたらいいかということを目標として言葉で表したもので、授業の中身を楽しくすれば子どもたちが集まってくる、そこが基盤であり、目的達成のために授業を楽しくしようと先生も努力するだろうということが前提である。言葉の使い方、ある意味では当初目的にしたことがある程度クリアできたとすれば、目標の設定の仕方を更に飛躍させることは必要だろう。言葉の使い方ですらに上を目指すことはいいことである。

小山教育長

言葉の問題に還元すると今のような「わかる」とはどういうことか、「魅力ある」とはどういうことか、という問題になってくる。同じ言葉を重ねることに問題はあるが、どういう言葉を使うか、直ちにAかBかCかではなく、もっと簡潔な表現にする。これはいろいろなところで同じ問題がある。全てを全部一緒にしてなんでもかんでもやる。重点化されていない。例えば5ページの「小中一貫教育、幼保小中の五感教育の検討、キャリア教育の推進」これが一番極端であるが、ありとあらゆる項目を全部入れた五目ご飯である。もう少し簡潔にして重点化する。狙っていることはこういうことですよと。言葉の問題は丁寧に説明することによって理解できる、共通理解できる。教育委員会と学校、学校と保護者というようにそれぞれの間で共通理解できる。「楽しい」といった時に「おもしろい」「腹をかかえて笑う」落語のような授業か、それとも「わかって楽しい」授業か、学校の目指す授業は「わかって楽しい」授業に決まっている。その部分をどっちなかということ自体問題外である。そういうところで議論するのではなく、枠をもっときちっとはめられるようなキャッチフレーズを、ということが大事だと思う。重点化も必要である。

様々な事業について事業の本質をもっと理解してから参加してもらおう。例えば学校支援地域本部事業について言えば、この事業は教師のためでなく生徒のためである。学校事業は最終的に全て子どものためである。この学校支援地域本部事業は学校の教員が多忙過ぎる、教員の負担を軽減することにより教員が生徒と向き合う時間を確保する、というのがこの事業の狙いである。事業の趣旨を考えずにただ議論だけすると問題が生じる。この事業の答えは何か明確化していかないとそういう問

題が出る。全ての事業において、この事業の狙いは何か明確に知らせて議論していかないと議論は高まっていかない。学校教育課の中でも生涯学習課の中でも少しずつ切り替えして周知が図れるようにしていく。

西田委員長

全体を通しての感想であるが、最初の「自己評価の方法」のところでは事業評価は「必要性、有効性、目標達成度、経済性・効率性」の観点から8つのポイントになっているが、顧客の評価的なものがない。事業だから必ず対象があり、相手がいる。事業の受益者、対象、相手の感想もしくは評価が入らないと本当の意味でのフィードバックにならない。一般的には顧客満足度というが、事業の対象から受けたサービスや利益についてどう感じたかを受け止めて初めて評価になるはず。大変難しいことだが、学校現場ではこれを授業に対して要求している。他のこともある意味では事業の目的ははっきりしているのに、その事業に対してどうだったかと対象者からのフィードバックを得ることを考えないと本当の意味での事業評価にならない。自己満足になってしまう。

自己評価にわざわざC、Aを付けた人それぞれに、本当にAと思いながらつけているのか、失礼だがCとつけながら「辛いな」というふうに思っているのではないかと思う。事業者の私たちに大事なことは「事業は相手がある」ということ。例えば図書館では本を何冊入れるか、市民の要望はどうか、時代の背景を考えてこういう本を入れるのが皆の要求していることであろう。そして予算を作って入れた。ではどれだけ貸し出しが増えたか、借りた人の印象はどうだったか、設営した本の内容に関して満足したか、そういうキャッチボールが必要である。その中で評価が出てくるのではないか。その部分がここで欠落しているという印象を持った。検討してもらいたい。

評価シートには委員からの意見とそれに対する考え方がある。まず評価は今後の課題であるから、自分たちが課題を検討した、外部からの意見を聞いた、意見に対して改めて大きな考えを示した、でも事業対象者からは何も聞いていない。むしろ委員さんたちのご指摘よりも事業対象者からの話の方が本当ではないか。客観的に委員さんから意見が出ることはもちろん大事だが、公金を使っての事業であるから、ある意味での評価は顧客、受益者から感想意見を聞いた方がいいのではないかと思う。

生田委員

4 - 「学校支援地域本部事業」で先ほど教育長から教師が子どもと向き合う時間を確保するために行っているという説明をされたが、8月上旬に丸子支会で教職員の総会があり、ある中学校の先生からこのような意見があった。合併前にあった

会議と同じような会議が合併後にも別にできた。似たような会議がいくつもあると時間が取られる、もう少し会議の精査をしてほしいという貴重な意見があったので検討してほしい。

1- 「きめ細やか支援体制の充実」とは結局は生きる力を育むことではないかと思うが、いろんな個性の子がいる。“僕でいいんだよ、私はこれでいいんだよ”と安心して実感できるような教育体制を作っていないと、生きる力も育たないし悲しいことになってしまう。

あるテレビのニュースで大学生がトイレでお弁当を食べているので、“トイレでお弁当を食べないで”と張り紙をした大学があると聞きとてもショッキングだった。学食で一人で食べるのが嫌だから食べる相手がいない時はトイレで食べたり、お昼を抜く。また一緒に食べる友達がいないと携帯で探す。探していないとお昼を抜くという学生がいた。皆でつるんで一緒だと安心だが一人だと不安。皆仲良し。皆同じでなくても皆が理解し合える、もしそういったことができれば、個性も尊重できるし違っていいんだよと安心もできる。そうしたことを小学校、中学校の義務教育の中でしっかり子どもたちが認識してもらえるようにするのが、教育委員会としての役目だと思う。一人一人違っていいという認識をしっかり子どもたちが持てば、トイレで一人で食べる子どもたちがいなくなるのではないかと思う。

西田委員長

いろんな意見や質問があったが、付け加えることや本当の視点にしてほしいことは早めに対応をお願いしたい。

小山教育長

今年度については、このまま出させていただきたい。今年度の事業評価を行う時に今いただいた意見を生かしていきたいと思っている。教育委員会としての教育行政の評価であるので感想的な評価になる。直接子どもたちと向き合っているのは学校であり、直接市民と向き合っているのは生涯学習で言えば依頼している様々な学習団体である。我々はそこに支援している立場である。しかし階層を持っていることを理解した上でどうフィードバックして我々の事業そのものを検討していったらいいのか、教育総務課中心に検討して次年度についてはその辺をはっきり明白にできるようにしていきたい。

全委員 了承

< 報告事項 >

- 1 教育委員会の現金処理に関する点検結果について
資料2により小野塚教育総務課長説明

西田委員長

公金と私的なものというふうに分けるのか。

小野塚教育総務課長

公金は市の会計に入ってくるもので実費弁償といった部分は私的な会計に入ってくる。ここで言っている任意団体というのは事務局等を持っている団体である。

西田委員長

現金は合ってあたり前。言葉の使い方はよくわからないが、結局現金残高と帳簿残高が合っているのが前提で、実査という表現を使うと思うが、そういう意味での現金の確認という意味でよいか。

小野塚教育総務課長

通帳等との付き合いもある。

西田委員長

お金に関することは合ってあたり前で大変であるが、公金であるので神経を遣っていたきたいと思う。

- 2 第4回子ども文化講座の開催について
資料3により中部文化振興課長説明

質疑 なし

- 3 第23回上田古戦場健康・ハーフマラソン大会及び第20回ともしびの里駅伝の開催について
資料4により細川体育課長説明

西田委員長

陸上競技連盟の公認コースというのは誰かチェックに来るのか。

細川体育課長

陸連指定の専門の方がきてコースを全て計る。

西田委員長

どんなものが条件になるか。

細川体育課長

高低についてはそれほど極端なことがなければよい。一番は距離である。

金子委員

参加者は公認コースにした方が増えるのか。

細川体育課長

長い距離に出場する方は、自分の記録を大事にしているので公認コースの方がよい。

西田委員長

21,0975kmということか。

細川体育課長

そうである。

4 行事共催等申請状況について

資料5 - 1 により小野塚教育総務課長説明

質疑 なし

資料5 - 2 により中村学校教育課長説明

質疑 なし

資料5 - 3 により澤山人権同和教育政策幹説明

質疑 なし

資料5 - 4 により中部文化振興課長説明

質疑 なし

資料5 - 5 により細川体育課長説明

西田委員長

99番は何て読むのか。

細川体育課長

スリーオンスリーという3人ずつでバスケットボールをする大会である。

西田委員長

先週の日曜日菅平のサニアパークへ行ってきた。全国各地から競技やラグビーに関係のないお年寄りが集まってくるのは素晴らしい光景である。2,3年前はアジアから、10年くらい前は若い女性の追っかけが多かった。最近追っかけはいないが、その代わりお母さん方がいっぱいいる。去年はかなり年配の追っかけのおばあちゃんたちが大勢お見えになった。ラグビー等スポーツに対する関心を寄せる流行は面白いと思った。大変見晴らしの良い所で1日楽しんだ。土曜日には菅平で合宿していたフルマラソンランナー夫婦のドキュメント番組があった。次の日にその選手も出場した世界陸上の女子マラソンがあり、いろんな意味で菅平の賑やかさが嬉しい感じだった。上田市の特色の一つとして益々盛んになってくれるといい。

5 その他

資料公民館だよりにより浅野中央公民館長説明

西田委員長

以上で8月の定例会を終了する。